

「大腸の癌・ポリープの X 線診断と病理」

癌研究会付属病院内科
丸 山 雅 一・著

東京医科歯科大学第2外科講師
宇都宮 讓 二

大腸は、胃と比較すれば、機能的には単純であるが、形態的には複雑である。近時、大腸ファイバースコープの発達により、その内腔を直視下に観察することが可能になったが、胃の場合のようにルーチンに行うわけにはいかない。したがって、X線検査の占める役割はより大きい。上部消化管の診断において世界を席卷したわが国の医学が、漸く下部消化管の領域にその歩を進めつつある時、その嚆矢として本書が刊行されたことは必然性のあることのように思われる。

この書は、単なる古典的教科書ではなく、また症例集でもない。著者自らが述べているように、“物に憑かれた心境”において始めてなしうる、若々しい情熱がほとばしる一つの芸術的作品と言ってもよい。本書の何よりも大きな意味は、すべて自らの経験に基づいて述べられ、しかも、それが昭和10年代生まれの若い学徒によりなされたことである。今

日まで、わが国の教科書と云えば、他人のものも自分のものも区別なく、中には不消化なままくどくどと述べたものが多かった。本書はそのような安易なやり方に対する痛烈な一矢であり、この書に接する読者に、単に知識のみならず、人の心を勇気づける力を与えてくれるものと思う。

本書の構成は、大腸のX線診断の手技、ポリープおよび癌の診断とその理論、症例編の三大部よりなる。

第1章 大腸のX線検査法では、経口法、充えい法の適応が実例を示して論ぜられ、二重造影法については、今日完成された one stage 二重造影法の歴史的 position について、Fischer, Welin, Brown の方法について平易に述べられている。

第2章 大腸の二重造影法の技術論では、著者の行っている one stage 二重造影法の手技と理論を詳述している。特に、ジャイロスコープを用いた撮影法は他に類書をみない本書

の独壇場である。

第3章 大腸ポリープおよび癌の肉眼所見では、X線診断の基礎となる切除標本の肉眼所見についての考え方を規定し、第4章 大腸隆起性病変および癌のX線診断理論では、その組織学的所見の裏付けを加えて良性・悪性の鑑別診断を主に詳しく述べている。

第5章 Borrmann III 型およびIV型の肉眼所見とX線診断では、進行癌(III~IV型)の診断が多くの貴重な症例によって論じられている。

最後に、47例の症例を、X線と肉眼所見、組織所見を対比させて、あまりにも美しくまとめている。その内訳は、良性ポリープ8例、有茎性早期癌4例、無茎性早期癌9例、変形 d { - , + } の Borr. I および II 型進行癌10例、変形 d { ++, +++ } の II および III 型進行癌3例、回盲部および近傍の進行癌4例、多発癌2例、ポリポーシス7例である。これらはいずれも、われわれの努力目標としての役割を示している。

本書の価値は、内科医としての著者が、疾患を一面にとらわれず、全体的に扱っているところにあり、それ故、初心者、専門者、内科医、外科医、放射線医と広い層に亘り愛読されるものと確信する。

A 4 頁202 図24 写真367
¥10,000 ㊦280 医学書院刊